

「冷酒」

野瀬 隆平

網走にあるその居酒屋はすでに大勢の客で賑わっていた。

カウンター席にすわり、まずは飲み物をと注文を取りに来た若い女性に、

「冷酒ありますか」と尋ねたところ、

彼女はキョトンとした顔で首を傾げ、訊いて来ますとって奥に入っていった。どうも「冷酒」の意味が解らなかつたらしい。

戻ってきて、日本酒なら「男山」「国稀」「北勝」等がありますと云う。それを冷やした状態で貰えますかと尋ねるとOKとのこと。根室で造っている「北勝」を選んだ。やっと、好きな冷酒でホッと一息つくことが出来た。いきなり「冷酒」といわれて、自分がお酒を呑まないの、戸惑ったのだろう。

翌日、網走から釧網線に乗って釧路に向かう。車窓から、何度か訪れたことのある原生花園や釧路湿原を懐かしく眺めている内に釧路に到着。

その晩は北海道での最後の夜である。確実に美味しい魚が食べられる店に行きたい。駅構内の案内所で、「ここなら満足いただけるでしょう」というすし屋を聞きだし、すかさず予約を入れ、夕刻店に向かう。

玄関を開けると、白木のカウンターが目飛び込んできた。着物姿の女性が、落ち着けそうな奥の席に案内してくれる。

「冷酒はありますか」と尋ねると、すかさず日本酒の銘柄が並んだメニューを差しだし、「どのお酒も冷酒としてお出しできます」という。網走でも呑んだのと同じ「北勝」を頼んだ。

白木のつけ台と新鮮な魚が収められたガラス・ケースを眺めている内に、お酒がでてきた。冷やしたグラスと共に、氷水の入ったチェイサーが添えてある。同じお酒でも、雰囲気によってこうも味が違うのかと、網走の居酒屋と釧路のすし店の差を実感させられた。いや、土地の違いと云うよりは、店のグレードの違いであろう。

大いに満足して店をでると、目の前に空のタクシーが止まっているのではないか。ホテルまで歩くのも億劫だと思っていたので、躊躇なくタクシーに乗り込んだ。かくて、北海道最後の夜は過ぎていった。